

「ぱくる」語源考

辻 本 桜 子

1. はじめに

「事故る」「サボる」「コピる（コピーをする）」「告る（告白する）」「タク（タクシーに乗る）」など、いわゆる「若者言葉¹」と呼ばれる「～る」の語形を持つ動詞は、「基本的に名詞の語頭 2 モーラに動詞の語尾『る』をつけて」（窪園，2002, p.86）形成されている。その為、接尾辞「る」を除くと原語が容易に推測される。しかし、「ぱくる」はどうだろうか。「ぱく」の原語は何か。和語には p 音で始まる語は少ないので、外来語、もしくはオノマトペであることを考えたが、どちらにしても原語の推測が容易ではない。そこで、「ぱくる」の語源を探ることにした。

最初に「ぱくる」の意味を辞書で確認をしてみる。『日本国語大辞典』（2006）における「ぱくる」の意味は次のようになっている。

- ① 大きく口をあけて食べる。ぱくぱく食べる。ぱくつく。
- ② 店先の商品などをかすめとる。金品をだましとる。かっぱらう。
- ③ 犯人などを逮捕する。検挙する。

①の説明にあるように、「ぱくる」は「ぱくつく」の「ぱく」に「る」が添加され成立したものか。『日本 語源辞典』（1981）にも「大きな口を開けて物を食うさま『パクパク』の擬態語を生かしたことば。」とあった。

また『隠語大辞典』（2000）には、「捕まえる。捕縛するの省略。」とい

¹米川（1997）によると「中学生から30歳前後の男女が、仲間内で、会話促進・娯楽・連帯・イメージ伝達・隠蔽・緩衝・浄化などのために使う、規範からの自由と遊びを特徴に持つ特有の語や言い回しである。」と定義づけされている（p.240）。

う説明があった。「捕縛（ほばく）する」の「ほ」と「す」が省略され「ばくる」になり「ばくる」と変化を遂げたのか。つまり語頭の b 音が p 音に変化したのだろうか。

2つの可能性を検証していく。次章では、語形と語義変化に焦点をあて、3章では音韻変遷に焦点をあて、語源を探っていく。

2. 語形と語義の変化

『隠語大辞典』（2000）を見ると、「ばく」「ばく」「ばくり」「ばくられる」……など、「ばくる」の派生語、関連語が多く掲載されている。関連語を意味の面から次の4つに分け、出典の刊行年次から順に並べ下表に記した。なお、本章では語形と語義の変化に特に焦点をあてて考察するため、表でも「ば」「ぱ」「は」の違いについては厳密に区別をせず、「ばくる」「ぱくる」「はくる」を区別していない。

<表1>

① ばく（麦）	② ばく（博）	③	④ ばく（縛）
麦飯のこと	賭博のこと		捕縛のこと
ばくつく（1915 ² ）		ばくる（1915）	ばくる（1915）
ばくつく		ばくる	ばくる
（麦飯にありつくの意？）		不良少年が金品を要求する	捕縛引致
ばくる（1930）		ばくり（1917）	
食べること		ばくり	
	ばくり（1956）	持ち逃げする	
	おどかして無理に賭金を張らせて 行う賭博		

²（ ）内の下線の数字は、辞典中の出典の刊行年を表す。

①③④の意味で、動詞形「ばくる」が見られる。

①については、「麦飯を食べる」つまり「名詞＋助詞＋動詞」から「名詞の省略形＋る」で、動詞化をしている。現代若者言葉でも多く見られる造語法である。(例：「タクシーに乗る」→「タクる」)

④については、捕縛する→縛→縛る。「名詞の省略形＋る」で構成されている。

米川(1989)によると、「外来語(略語)から動詞を派生させるために活用語尾『る』をつけた語は明治後期から多く見られ」、一番古くは「1903年発表の小杉天外の『魔風恋風』にある『エンビる』『バイオる』」である。

「^{きつと}必然、^{エンビ}貴方を妬る者の為た事なんだわ」(前編第六－三)

「^{バイオ}犯られたの？」(同上)

「エンビる」は“envy”(ねたむ)に「る」をつけた語、「バイオる」は“violate”(犯す)の後略したものに「る」をつけた語である。(米川, 1989, p.112)

米川(1989)は明治末期の学生語として他に、“company”(交際)を略した「コンパ」の動詞形「コンパる」も挙げている(p.112)。

「ばくる」の造語法には①と④では違いが見られるが、「～る」語の誕生が1903年以前、「ばくる」出典の初年が1915年であるのを見れば、「ばくる」がこの新しい造語法を取り入れ作られたことが分かる。

次に前述の『日本国語大辞典』(2006)の「ばくる」の意味と『隠語大辞典』(2000)から考察した語義に基づく語源を並べてみる。

<表2>

「ばくる」

意味	予想語源
① 口を開けて食べる。ばくつく。	麦飯を食べる。
② 店先の商品などをかすめとる。 金品をだましとる。	
④ 逮捕する。	逮捕する。

①の「食べる」の意味の「ばくる」は、『日本 語源辞典』(1981)の「『パクパク』の擬態語を生かしたことば。」という説明も検証しなければいけないので更に考察が必要だ。いずれにしても「捕縛する」ではなく、何か食べることに関する語が語源になっていると考えられる。

②の「かすめとる」「だましとる」の語源は、『隠語大辞典』(2000)からの考察では不明であった。「賭博する」の意味の「ばく(博)」の派生語で、名詞形「ばくり」の説明の中に、「おどかして無理に賭金を張らせて行う賭博。博打でひったくるの省略。」という説明あり、ここから「他人の物を横領する」「だましとる」と意味の拡大が起こり、現在用いられる意味になったのだろうか。これについても現時点では仮説の域を出ず、後述にゆずる。

『隠語大辞典』(2000)の中の見出し語、出典例文では、「ばくる」「はくる」「ぱくる」と語形にゆれが観察されるが、1950年前後から「ばくる」で落ち着き、語頭 b 音から p 音への変化を遂げたことが分かる。

なぜ「ばくる」から「ぱくる」へ、b 音から p 音に変化したのか。次章では、音韻変遷から「ばくる」の語源を考察する。

3. 音韻の変遷

「ばくる」「ぱくる」の b 音、p 音の違いは、有声音か無声音かであるので、b 音→p 音の変化には声帯振動の省略化(簡略化)が理由としてまず考えられる。しかし、日本語の中で、語頭の b 音から p 音に変化を遂げた語は想起し難い。それゆえ他の理由を考察することにした。『日本 語源辞典』(1981)では、「パクパク」の擬態語が語源であるように記述があったことを考慮し、「ばくばく」、「ばくつく」が語源である可能性を探る。もう一度「ばくる」の「ばく」に注目する。隠語辞典類では、1915年出典の「ばく」までしか遡ることができなかったが、辞書に現れた最も古い「ばく」は、『時代別国語大辞典 室町時代編4』(2000)掲載の「ばく(麦)」である。『日葡辞書³』においては⁴、「ばく(麦)」と「ばくち(博奕)」の2語が確認された。しかし、私がより注目したのは、『角川古語辞典』(1994)が取り上げている「ばくばく」というオノマトペである。

ばくばく・・・副 擬態語。

齒の抜けた老人の口の動くさまをいう。

「ばくばくするのが壺人（死ニソウナ姑）と仲人いい」
（『川傍柳・2』）

「乙姫をメて帰へるとばくばくし（＝浦島衰老）」
（『誹風末摘花・3』）

『江戸語辞典』（1991）でも見出し語「ばくばく」で、「老人の齒の抜けた口を開閉するさま」と説明があった。

『角川古語大辞典』（1994）の出典にある『川傍柳⁵・2』は1781年に、『誹風末摘花⁶』は1776－1801年に編纂された。どちらも川柳本で、齒の抜けた老人の様子を風刺をする語として「ばくばく」は使用されている。ここでオノマトペ「ばくばく」が確認できる。

『隠語大辞典』（2000）で見た「ばくつく」はこの「ばくばく」のオノマトペから派生したものであると考えられるが、「ばくつく」と共に「ばくつく」も見出し語として挙げられていた。どちらも出典の刊行年は1915年であった。更に『日本俗語大辞典』（2003）では見出し語に「ばくつく」はなく、「ばくつく」が挙げられ、1871年の出典の刊行年が挙げられている。更に『擬音語・擬態語辞典』（1974）では、「ばくっ」「ばくばく」「ばくり」と1972年の出典が挙げられ、「ばくばく」のバリエーションが広がっている。いつ「ばくばく」に変わったのか。また「ばくばく」はいつ発生したのか。

ここまで分かった語形の変化を、辞典の例文の出典の刊行年と共に、一度表にまとめる。

³1603年編纂。日本人の協力のもとでイエズス会宣教師たちの手によって成る。形式・内容ともに当時の日本語の辞書としては最高最大のもの。ローマ字表記であるので、当時の日本語の音韻体系を知ることができる（真田, 1999）。

⁴土井忠生・森田武・長南実（編・訳）（1980）『邦訳 日葡辞書』岩波書店に拠る。

⁵『誹風 柳多留』・『誹風 柳多留拾遺』・『誹風 末摘花』などの選句集に載せられなかった、初代川柳を中心とした組連（一種の作句団体）が催した月並句会の成果である組連句集12冊を紹介した著書の一つ。牛込御納戸町蓬萊連の句集。（<http://www.geocities.jp/hiretsjs2004/>）

⁶「川柳評の万句合（まんくあわせ）にある末番句（すえばんく）すなわち好色的な句を集めた書。」（『広辞苑』, 1998）

<表3>

ばく⁷ (麦) (1392-1573)

ばく (麦) (1603)

ばくばく (1776-1801) (1781)

ばくばく ?

ばくつく (1871)

ばくつく (1915)

ばくる (1915)

「ばく/ばく」に「つく」を添加

ばく (1930)

ばくる (1930) 「る」を添加

ばく (1932) 「る」を省略

ばくっ

ばくっ

ばくばく (現在)

ばくばく (1972)

ばくり

ばくり

最後の「ばくっ」「ばくばく」「ばくり」は、辞書での出典を確認していないが、現代日本語において使用されている語であるので、パ系に対応するものとして書き加えた。

<表3>のように、「ばくる」が「ばくる」に変化したと考えるのではなく、「ばくる」は「ばくばく」から、「ばくる」は「ばくばく」から、別々に派生したと考えるのが妥当ではないだろうか。その為、波線「ばくばく」を仮定した。「ばくばく」はいつ発生したのか。

⁷ 「ばく (麦)」については、室町時代編の『時代別国語大辞典』で確認されたことから、1392-1573 (室町時代) の年号と、『日葡辞典』編纂の年、1603を参考に記した。

「ぱくぱく」起源を遡る前に、日本語のハ行音の音韻変遷について言及すると、上代では p 音/pa, pi, pu, pe, po/ であった語頭ハ行の音韻は、唇音退化し、奈良時代以降、室町頃までには f 音/Φa, Φi, Φu, Φe, Φo/ で発音されるようになった。更に唇音退化が起こり、江戸元禄頃までには/ha, ci, Φu, he, ho/ になった。そして現在に至る。しかし、和語で古くから p 音を保っていた語も僅かながらにある。

1603年編纂の『日葡辞書』で、ハ行のローマ字を用いた表記を見てみよう。

は = fa、は = va、ば = ba、ぱ = pa

fa 音が圧倒的に多く、va は助詞の「は」1 語のみ。pa は 8 語確認されたが、「ぱっぱと」「ぱらりと」「ぱしと」「ぽんぽん」など、そのすべてがオノマトペであった。『日葡辞書』編纂以降、元禄時代 (1688-1704) までに語頭の f 音/Φ/ は/h/ に変化を遂げたわけだが、江戸中期以降、外来語の流入と共に p 音の使用も増加した。

江戸時代に流入した外来語には、ポルトガル語、スペイン語、オランダ語がある。松村 (1972) から、江戸時代に日本語に流入した外来語で p 音が含まれるものを挙げる。

ポルトガル語から・・・「パン⁸」「パライソ (天国)」「カップ」

オランダ語から・・・「コンパス」「タラップ」「ピストル⁹」「シロップ」「ドロップ」「ペン」「ペンキ」「ポンプ」「ランプ」 (pp.269-270)

このように p 音を用いた外来語が導入されると共に、p 音を用いた新語も誕生したと想像できる。「ぱくぱく」はそのような、p 音新語の一つとして成立したのではないかと考える。

「ぱくぱく」は1776年の初出典が確認され、「ぱくつく」は1871年の出典が確認されたことから、特定はできないが、「ぱくぱく」は1871年までには成立したと推測できる。

また、なぜ「ぱくぱく」が成立したか。その背景は、ハ行音オノマトペの体系化にあると考える。

⁸ 「パン」の初出は『長崎見聞録』(1795) である (渡部, 1938)。

⁹ 1869年頃初めて輸入された (渡部, 1938)。

ハ行の多くのオノマトペは、次のように濁音、半濁音、または濁音、半濁音、清音の対立関係にある。

b	—————	p	—————	h
濁音		半濁音		清音
例：ばさばさ		ぱさぱさ		
ばきばき		ぱきぱき		はきはき
ばらばら		ぱらぱら		はらはら

『日葡辞書』におけるハ行のオノマトペで、語頭がp音以外のものを全て挙げる。

ばたばた、はたはたと、ばちばち、はちはちと、ばらばら、はらはらと、ばらりばりと、ばらりと、ばらりと、はらりと

このうち最後の「ばらりと」「ぱらりと」「はらりと」だけは、b-p-hの対立を成しているが、他のオノマトペはb-hの対立しか成していない。しかし実際、現代日本語の中では、「ばたばた」に対して「ぱたぱた」、「ばちばち」に対して「ぱちぱち」の半濁音オノマトペが存在している。

これらのp音オノマトペは、1603年『日葡辞書』編纂の後、江戸時代後期、外来語のp音流入の後に成立した比較的新しいオノマトペだと考えられる。/Φ/が/h/に変化を遂げた後、p音を用いたオノマトペも増加した。

「ばくばく」と「ぱくぱく」の対立も同様にして、まずb音オノマトペが成立した後、p音オノマトペが成立したのである。どちらも口の開閉の様子から食べている様子を表すオノマトペとして成立した¹⁰。そして、それぞれが、

「ばくばく」－「ばくつく」－「ばくる」

「ぱくぱく」－「ぱくつく」－「ぱくる」

と派生していったと考える。

それでは、なぜ「ばくる」と「ぱくる」と別々に派生した言葉のうち、「ばくる」だけが使用されるようになったのか。次章では使用者集団に焦点をあて、更に考察を行う。

¹⁰ 「ばくばく」は「ばく（麦）」からの連想で食べている様子を表すようになった可能性もある。

4. 使用者集団

まず始めにここで、前章で考察したことを踏まえ、2章で提出した＜表2＞を修正しておく。

＜表2'＞

「ばくる」

意味	予想語源	「る」動詞形
①口を開けて食べる。 ばくつく。	麦飯を食べる。 ばくばく。ばくばく。	ばくる
②店先の商品などを かすめとる。 金品をだましとる。		ばくる、ばくる
③逮捕する。	捕縛する。	ばくる、ばくる、 はくる

①の意味の「ばくる」の語源に「ばくばく」「ばくばく」を加えた。そして、『隠語大辞典』（2000）の出典例文からそれぞれの意味における「る」動詞形を追記した。①の意味では、「ばくる」で語形は安定している。この「ばく」は「ばくばく」由来であると考えて間違いない。問題は②と③である。

②は「ばくる」と「ばくる」でゆれている。

③は「ばくる」「ばくる」「はくる」でゆれている。③の例を見る。

「ばくる」「はくる」（1915¹¹）→「ばくる」（1929¹²）→「ばくる」（1935¹³）→「ばくる」（1948¹⁴）b / h → p → b → p へとゆれが見られ、そして1948年以降は「ばくる」で定着したようだ。なぜゆれが発生したか、いくつかの理由が考えられる。使用者集団に焦点をあて、考察を行う。

語彙に使用者範囲を付している辞典のうち、「ばくる」関連語の記述が詳しいものは、『チョーフグレ』（1930）と『隠語辞典』（1956）の2冊で

¹¹ 『隠語輯覧』（1915）出典

¹² 『かくし言葉の字引』（1929）出典

¹³ 『隠語構成の様式并其語集』（1935）出典

¹⁴ 『隠語符牒集』（1948）出典

あった。以下、この2冊の辞典から考察を行う。

4.1 「ばくる」－「食べる」から「横領する」へ－

『チョーフグレ』（1930）における「ばくる」関連語として、次の語を下表にまとめる。

<表4>

	意味	語形	使用者
一般	食べる	ばくつく	楽屋・的屋・一般
		ばくる	楽屋・的屋
		ばく	不良者・楽屋
		ばくあがり	楽屋
特殊化	他人の物を横領する → ばくる ばくつく、食い物にする		楽屋・犯罪者

『チョーフグレ』（1930）では「食べる」を表す関連語として、「ばくつく」「ばくる」「ばく」「ばくあがり」が見出し語にあった。そのうち「ばくつく」使用者は、「楽屋¹⁵」「的屋」の他、「一般にも使われる言葉」とあった。「ばくる」はこの一般にも使用された「食べる」の意味から、「他人の物を横領する」の意味の「ばくる」へ意味の拡大が起こったのだろう。省略形「ばく」の使用者「不良」と「他人の物を横領する」意味の「ばくる」の使用者「犯罪者」は、ほぼ重なりと見ることができる。一般的事象「食べる」の連想から、より具体的、個別的事象「横領する」「食い物にする」へ、意味の特殊化が起こったと考えられる。

『隠語辞典』（1956）で更に「食い物にする」の意味の「ばくる」の説明を見る。

¹⁵ 劇場、活動写真館、義太夫、人形操り、寄席、又は之等演藝人、落語家、講談師仲間（『チョーフグレ』，1930，p.2）

語形	意味	使用者
ばくる	①かっぱらう	不良
	②強奪する	不良
	③ゆする、おどし取る	不良
	④逮捕する	犯罪者

「食べ物にする」意味の「ばくる」の意味の多義化が起こっているのが分かる。いや、多義化が起こったのではなく、より多くの事象を「ばくる」で表すようになったと考えられる。なぜ「ばくる」の転用が行われたのか。次節では「ばくる」使用の背景と必要性を考察する。

4.2 「ばくる」使用の必要性

『隠語辞典』（1956）では「かっぱらう」「強奪する」「ゆする、おどし取る」の使用者集団は「不良」とあった。ちなみにこの時代、明治、大正時代の「不良」は現在の「不良」とは異なる。『チョーフグレ』（1930）では使用範囲を示す語の内、「不良者語」は、「即ち不良少年少女や浮浪者、乞食仲間等」に使用される語であると説明している（p.3）。つまり、「不良者」は「浮浪者」や「乞食」と行動範囲、言語使用範囲が同等の者であったということである。不良少年には高等・中等・下層があり、このうち下層不良少年は「グレ」と呼ばれていた（鈴木, 1923）。そして、「グレ」とは「進んで父母の監督を離れ、家庭の圏内を脱したる者」（同, p.45）であった¹⁶。つまり、彼らは浮浪者たちとともに、多く、路上で生活していたのである。当然、生活費を自ら稼がねばならず、「集団で悪事を働くことになるのが多く、やがて更に専門的な反社会集団の中へ流れ込んで」いったのである（『隠語辞典』, 1956, p.483）。犯罪が日常化した彼らにとっても、「かっぱらいに行こう。」「今日もかっぱらった。」に代わる「隠語」がカムフラージュのため必要になった。そこで「ばくる」が使用されるようになったのだろう。彼らにとって「ばくること（犯罪を犯すこと）」は「ばくること（飯を食うこと）」とまさに同義なのであ

¹⁶ 「グレる」の語源は「はぐれる」「まぐれる」に由来する（鈴木, 1923, p.45）。

った。

一般語から転用された犯罪者の隠語として、他に例えば、「盗む」という意味で、「買う/稼ぐ/摘む/買する/もらう」などがある（『隠語辞典』, 1956, p.510）。同辞書の解説で、榎垣の述べる犯罪者の隠語使用の心理と意図を簡単にまとめる。①精神的負担から解放されようとする心理。②仲間意識を高めるという意図。③守秘のため（同, pp.470-471）。あからさまに言うのを避け、遠回しに表現する必要性から、婉曲表現として隠語は使用された。そして手軽にできるためであろうか、隠語辞典類では、一般語から転用をした隠語が多く観察される。

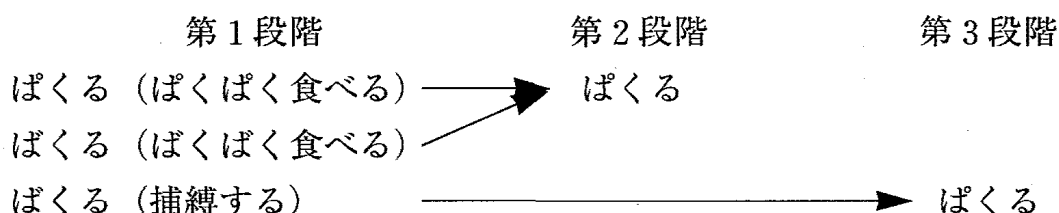
4.3 「ばくる」－「捕縛する」との関係

「捕縛する」は「捕縛」から語頭の「捕」が省略され、「ばくる」と変遷を遂げた。造語法の省略の中では、単語の下部を省略する「下略」が多く、実に4割以上を占めている（米川, 1996, p.41）。しかし、犯罪者隠語では、秘密保持のため元の語形を分かりにくくするために、単語の上部を省略する「上略」が多い（米川, 同, p.38）。例えば、下記のようなものがその例である。

名詞： カツ（恐喝）、ビキ（万引き）（加藤, 1982, p.187）
 サツ（警察）、ガイシャ（被害者）（『隠語輯覧』, 1915, p.3）
 動詞： ばられる（引っぱられる）、かまる（捕まる）（同, p.4）

「捕縛する」も、「秘密保持」の理由から、上部「捕」が省略されたのである。その後、「ばくる」への変化予想図を下記に記す。

<表5>



まず第一段階として3つの異なる語があった。「捕縛する」の「ばくる」

は、「食べる」の「ばくる」と偶然同じ語形であった。次に「食べる」意味の動詞は、p音オノマトペの語感の刷新さのためか、軽快さのためか、「ばくる」の語形の普及が進み定着した（統一された）。同音異義語であった「ばくる」が「ばくる」で定着したことにより、犯罪者たちは「ばくる」から、類音で一般語である「ばくる」を積極的に使用するようになり、定着したのではないだろうか。

5. 結び

最後に、前章の始めに提示した〈表2'〉を修正し、「ばくる」の語源をまとめる。

〈表2''〉

「ばくる」

意味	語源
①口を開けて食べる。ばくつく。	ばくばく → ばくばく
②店先の商品などをかすめとる。 金品をだましとる。	「ばくる」の転用
③逮捕する。	捕縛する → ばくる → ばくる

①の意味の語源は「ばくばく食べる」の「ばくばく」である。

②の意味の語源も「ばくばく食べる」で、「食い物にする」などの意味で使用されるようになった。

③の意味の語源は「捕縛する」で、上略と「る」言葉造語法により「ばくる」へ。そして「食べる」の意味の「ばくる」の語形変化（統一）に伴い、「ばくる」が使用されるようになった。

結論として、「ばくる」の語源は「ばくばく」であるということが分かった。

引用文献

- ・ 榎垣実（編）（1956）『隠語辞典』東京堂出版
- ・ 窪園晴夫（2002）『新語はこうして作られる』岩波書店
- ・ 鈴木賀一郎（1923）『不良少年の研究』大鏡閣

- ・米川明彦 (1989)『新語と流行語』南雲堂
(1997)『若者ことば辞典』東京堂出版

参考文献

- ・伊坂淳一 (1993)「P音は『復活』したのか」『月刊言語』2月号, 大修館書店, pp.20-25
- ・猪塚元・猪塚恵美子 (2003) 町田健 (編)『日本語音声学のしくみ』研究社
- ・上村幸雄 (1989)「五十音図の音声学」杉藤美代子 (編)『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻 (上)』明治書院, pp.41-63
- ・加藤正信 (1982)「現代の隠語」佐藤喜代治 (編)『現代の語彙 講座日本語の語彙 7』明治書院, pp.175-190
- ・佐藤武義 (1995)『概説 日本語の歴史』朝倉書店
- ・真田真治 (1999)『よくわかる日本語史』アルク
- ・松村明 (1972)『国語史概説』秀英出版
- ・米川明彦 (1989)『新語と流行語』南雲堂
(1996)『現代若者ことば考』丸善ライブラリー

辞書

- ・天沼寧 (編) (1974)『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版
- ・榎垣実 (編) (1956)『隠語辞典』東京堂出版
- ・大久保忠国・木下和子 (編) (1991)『江戸語辞典』東京堂出版
- ・大槻文彦 (1956)『新訂 大言海』富山房
- ・木村義之・小出美河子 (編) (2000)『隠語大辞典』皓星社
- ・栗田書店編集部 (編) (1936)「隠語辞典」[『新聞語辞典』付録] 松井栄一・渡辺友左 (監) (1996)『隠語辞典集成 7』大空社
- ・小学館国語辞典編集部 (編) (2006)『精選版 日本国語大辞典』第3巻, 小学館
- ・鈴木賀一郎 (1923)『不良少年の研究』大鐙閣
- ・高久景一 (編) (1931)「司法警察 特殊語百科辞典」松井栄一・渡辺友左 (監) (1996)『隠語辞典集成 6』大空社
- ・富田愛次郎 (監) 高芝巖 (1915)「隠語輯覧」松井栄一・渡辺友左 (監) (1996)『隠語辞典集成 2』大空社

- ・土井忠生・森田武・長南実（編・訳）（1980）『邦訳 日葡辞書』岩波書店
- ・中村幸彦・岡見正雄・坂倉篤義（編）（1994）『角川古語大辞典』第4巻, 角川書店
- ・新村出（編）（1998）『広辞苑』第5版, 岩波書店
- ・西堀忠治（1933）「全国隠語集 符牒なら何でも」松井栄一・渡辺友左（監）（1996）『隠語辞典集成7』大空社
- ・樋口栄（1935）「隠語構成の様式并其語集」松井栄一・渡辺友左（監）（1996）『隠語辞典集成8』大空社
- ・前田富祺（監）（2005）『日本語源大辞典』小学館
- ・南霞濃（1930）「チョーフグレ」松井栄一・渡辺友左（監）（1996）『隠語辞典集成4』大空社
- ・村石利夫（1981）『日本 語源辞典』日本文芸社
- ・室町時代語辞典編修委員会（編）（2000）『時代別国語大辞典 室町時代編4』三省堂
- ・米川明彦（編）（2000）『集団語辞典』東京堂出版
（2003）『日本俗語大辞典』東京堂出版
- ・ロドリゲス（著）土井忠生（訳）（1995）『日本大文典』三省堂
- ・渡辺善彦（1938）「語源解説 俗語と隠語」松井栄一・渡辺友左（監）（1996）『隠語辞典集成9』大空社（1996）
（立命館大学大学院修士課程）